



関西の中小企業が下請け体質からの脱却を加速している。大学と連携して新規事業を始め、自社ブランド製品を立ち上げるなど独自の収益源を確保し、特定企業に依存しない収益構造を目指す。関西では仕事を発注する側だった大手電機メーカーの経営不振や得意先の海外シフトで、受注側の中小企業は仕事量が激減した。危機感をバネに経営改革を急ぐ機運が盛り上がっている。

下請け中小 技術で自立

電機など不振で危機感

大手企業の開発担当者。ステンレスより強く、金属加工の二九精密機械工業（京都市）。目当ては同社が7年がかりで開発した「ベータチタンパイプ」だ。チタン合金を独自技術でパイプ化した。訪問が途切れないのは、何度曲けても元の形状に戻るうえ軽い。

大学とも連携

同社はもととパナソニックなどから金属加工の仕事をお願い負っている。

金属加工「二九」極細チタンパイプ

た。チタン合金はメカネフレームの素材だったが、大手メーカーが「医療機器に使えないか」と打診。京都工芸繊維大学のチタン研究者ら外部の専門家とも連携して、製造装置を独自開発した。最終で外径0.4mmのパイプ加工に成功したことから、血液分析機器の部材として2011年にシスメックスが採用した。量産のために4億円を投じて京都に工場を新設し、今年1月から生産を始めた。用途は当初想定していた分析装置向けから広がり、内視鏡やカテーテル（医療用細管）、釣り具などで採用され、直近1年半の新規取引先は約100社と、以前の5〜10倍に急増した。14年3月期の売上高は前期比2割増の20億円を見込む。二九良三社長は「単に部品を供給するだけでなく、設計や組み立ても自社で手掛け、下請けからメーカーに脱皮したい」と話す。